

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 31 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520299

研究課題名（和文） 日米カリブ海文化に関する比較文学的家族論

研究課題名（英文） Comparative Family Studies in Japanese, American, and Caribbean Literatures

研究代表者

橋本 安央（HASHIMOTO YASUNAKA）

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：60300274

研究成果の概要（和文）：近代国家の形成過程における家族意識、棄子意識の変容を、日米カリブ海の文学作品を対象にして分析した。とりわけアメリカ文学作品を中心に、暴力の主題を補助線として成果を収めたものを、学術雑誌、英語による学術図書、および日本語による一般図書において発表することで、国内外の学界や読書人に向けて幅広く発信した。

研究成果の概要（英文）：This project explored awareness of identity among families and orphans in the formation of modern societies, from the comparative viewpoint of Japanese, American and Caribbean literatures, with special consideration of the collateral issue of public violence. The project's findings, especially the section on American literature, have been published in a range of academic journals and non-specialist publications in Japanese and in English.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	900,000	270,000	1,170,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：文学、家族、暴力、国家

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究代表者はこれまで主に、日米カリブ海文学における現代作家、および米国の古典作家ハーマン・メルヴィルに関心を抱いてきた。その過程で論文をまとめ、著書を刊行し、また英語圏の現代小説を翻訳してきたが、こうした営みの根底にあったものは、家族を

めぐるさまざまな変奏に対する関心であった。代表的なものを挙げるならば、カリブ海文学と現代日本における家族の差異と相似性をジャマイカ・キンケイドに求めた作家論や同作家の作品の翻訳、ティム・オブライエンをめぐる米ソの冷戦構造と父の不在の関連を論じたもの、戦後日本における父の喪失をめぐる高橋和巳論の著書などがある。そ

れらに理論的根拠を与えるために、カルチュラル・スタディーズの理論書の訳出も試みた。そうした作業のなかで次第にみえてきたのは、文化的政治的背景が如何に異なっていようと、家族というイデオロギーが近代人の精神に深く根をおろしているということであり、また、異文化間においても、それらがときに驚くほど酷似する場合があるということであった。それと同時に冷戦という枠組みとその崩壊後において、家族の主題が同時進行的に変遷している様子もみてとれた。

(2) こうした蓄積を踏まえて、米国文学の19世紀および現代小説と、日本の戦後文学、カリブ海の現代文学をめぐり、比較文学的視点から、日米カリブ海文化における国家と家族、家族と個人のさまざまな特性を抽出する。

2. 研究の目的

(1) 現代日本の家族は西洋のそれとは異なり、子ども中心の社会と捉えうるが、20世紀後半以後、そこには産業構造の変化、および第二次世界大戦後に流入してきたアメリカ型民主主義が変則的に消化された、日本式新教受容の痕跡が窺われる。それら新道徳が生み出した男女の性愛と結婚、家族意識は、たとえば所謂「内向の世代」の作家たちのように、一見冷戦という西洋中心の枠組みに影響されることもなく、イデオロギーとは無縁のところにあつたようにもみえる。だが、彼らの政治的無関心の裏側には、逆に新時代の新道徳としてのキリスト教の倫理規範への意識があり、かつ朝鮮戦争を契機とした、冷戦構造の賜物ともいえる高度成長という時代背景があつたといえよう。さらに1980年前後以後、少子・高齢化が進み、米国文化が〈普遍化〉〈内在化〉された時代になると、そうした日本の新道徳も変容する。そこにもまた、米国文化と連動する共通のダイナミズムが隠されていると考える。

(2) 以上の仮説に立ち、本研究では、以下の枠組みを立てて研究を遂行する。

① 1960～70年代米国における、冷戦の終わりの始まりともいえるヴェトナム戦争反戦思想の芽生えを、カート・ヴォネガットなどにみられる国家身体としての暴力の主題に跡づける。

② それと同時に、①における性愛観、家族観を浮き彫りにするために、①と極北に位置する同時代作家ジョン・アップダイクなどの作品と比較検討する。

③ ②のほぼ同時代作家にあたる我が国の

古井由吉などを米国作家と比較し、一見イデオロギー意識が欠如しているともみえる彼らの作品に潜む暴力観、性愛観、および家族観を比較検討する。

④ ①における米国内での国家暴力に対する意識と、米国の19世紀作家ハーマン・メルヴィルの小説世界に潜む父子の主題と他者侵略言説との一致点を、ポストコロニアリズムの視点も援用しつつ探り出す。

⑤ 同様の範疇を、カリブ海域と欧米との関係性に求め、現代作家ジャメイカ・キンケイドなどをめぐり、コロニアリズムと家族意識との関わりを測定する。

⑥ 冷戦イデオロギー崩壊後の家族意識の変容を、〈内在化されたアメリカ〉意識を抱く日本作家、村上春樹などにおける孤児意識から読み取ってゆく。

3. 研究の方法

(1) 米国の図書館で、メルヴィルやホーソンといった19世紀作家、および彼らの親族を含めた書簡の類いを閲覧し、私的空間における作家の家族像を構築する。また、米国にて開拓期に関わる資料収集、フィールドワークを行う。

(2) 米国の図書館・古書店などを利用して、1960～1970年代の家族をめぐる資料として、雑誌・新聞などの文献を閲覧・入手する。

(3) パーソンズなどによる社会学、アナル学派の歴史学、アッカーマンなどによる精神分析学、エスピン・アンデルセンなどによる政治経済学などの分野における家族論を、互いに関連づけるかたちで読み直す。その際ジェンダーの視点も有効であると思われる。

(4) 米国の19世紀作家をめぐり、ポストコロニアリズム理論の先行研究も踏まえながら、総合的家族論の文脈で、(1)(3)で吸収したものを、論文ないし共著書のかたちで発表する。

(5) 現代の米国の小説を読む作業にも力を入れる。とりわけカート・ヴォネガット、ジョン・アップダイクなどの作品。これらと(2)の作業で収集した資料(ジャーナリズム的なものも含む)を比較して、冷戦構造と関わるかたちでの国家暴力の主題と、家族との関係性を、ボディ・ポリティクをめぐる先行研究も踏まえた上で抽出する。

(6) 戦後日本の作家、阿部昭、古井由吉な

どをめぐり、暴力、性愛、家族観を読み取る作業に着手する。

(7) (5) の文学を吸収しながら作家となった日本の小説家として、吉本ばなな、村上春樹などを、(5) と同様のアプローチで再読し、相似と差異を見出す。また、戦後日本文化における家族論として、(6) と比較検討もする。

(8) ポストコロニアリズム理論の本丸ともいふべき、ジャメイカ・キンケイド、ジョン・リースなどのカリブ海作家を幅広く読むことで、(4) の作業で得られた 19 世紀米国文学、(5) の作業で得られた戦後の米国文学との距離と共通点を確認し、(7) の現代日本における家族の議論にも導入する。

4. 研究成果

(1) 2009 年度については、社会学、歴史学、精神分析学、政治学に関する基本文献を読みこむ作業を中心に行った。それに加えて、19 世紀アメリカ文学、とりわけハーマン・メルヴィルの初期作品、および代表的作品である『白鯨』をめぐり、家族論の基盤として、「暴力」と国家、「暴力」と個人の関わりを精査した。その際に、基本的な資料を収集し、アメリカの開拓期における国家的暴力の過去と現在を、フィールドワークをつうじて確認する作業も行った。

メルヴィルの初期作品には、開墾と産業主義化が進むなかで、初期植民者たちが当初抱いていた、新世界の「自然」の圧倒的な風景という理想像が喪われつつある、19 世紀中葉の時代が反映されている。そのような時代において、新世界から南海に浮かぶ島々をながめるメルヴィルの初期作品の語り手のまなざしには、あるべきはずの「自然」の喪失感を補いつつ、文明論をとおして新大陸を旧大陸と同等に位置づけんとする欲望の力学が働いている。そうした点を、アメリカの風景美学と地質学、考古学なども参照しつつ、フィールドワークを踏まえた上で検討した。他方、『白鯨』におけるエイハブ船長の「暴力」の姿には、天地創造の驚異と崇高の概念につらなる火山のイメージも重ねられている。そしてまた、エイハブがモウビー・ディックとの直接対決を挑まんとする営みには、自身が涙から、そして季節のサイクルから疎外されているとの自意識も連動している。そのような複雑なエイハブの暴力性のありようを調査する作業に着手した。

(2) 2010 年度は、米国の現代作家、とりわけカート・ヴォネガット、ジョン・アップダイクなどの作品を読みこむ作業を中心に行った。それに加えて、19 世紀作家ハーマン・

メルヴィルの孤児意識と暴力という大きな枠組みのもとで、メルヴィル作品を精読する作業も継続的に行った。その過程において、狂気の主題が関連してきたため、19 世紀アメリカの精神医学言説も精査した。とりわけ『詐欺師』における詐欺のありようが、聖書的な非科学的迷信も含む狂気言説を詐取したそれである点を明らかにし、英語論文集 *Melville and the Wall of the Modern Age* (南雲堂) における第 8 章、“Mirrors of Madness: *The Confidence-Man* and 19th-Century American Psychiatry” においてその成果を公刊した。

また、全体主義者として批判されることが多いエイハブ船長のありようを、精読を通じて読み直した。とりわけ対抗文化の時代以後、9・11 テロル事件を経て、圧政的な暴君であるとの解釈が定番となっているエイハブ船長の暴力には、孤児にも通じる疎外意識が色濃く窺われもする。その結果、緑の再生サイクルと人類から疎外され、涙を流すことすらかなわなくなるエイハブの自意識を中心に据え、エイハブの複雑な暴力性を明らかにした。その成果を、論文「エイハブの涙——『白鯨』再読——」として発表した。

(3) 2011 年度は、カリブ海文学、および日本の現代文学の作品を読む作業に着手した。それに加えて、継続的に取り組んでいた課題として、ハーマン・メルヴィルの第一作『タイピー』をめぐり、メルヴィルおよび 19 世紀アメリカの折衷的な風景美学と南太平洋の関連を検討することで、メルヴィルの原風景を確認する作業を行い、それを一般向けの共著書『異相の時空間——アメリカ文学とユートピア』(英宝社) の中で、論文「追憶のなかの南海——『タイピー』と永遠の風景——」として発表した。同じくメルヴィルの代表作『白鯨』をめぐり、エイハブとイシュメールの孤児意識と母との関係を論じたものを、北海道アメリカ文学会にて報告をした後、アメリカ学会機関誌『アメリカ研究』に掲載した(『白鯨』の海、棄子の夢)。さらにメルヴィル中期の短篇作品「エンカンターダズ」をめぐり、神に見棄てられし棄子の祈りの在りようについて、日本ソロー学会全国大会シンポジウムで報告した。

間接的に関わる作業として、20 世紀アメリカの代表的詩人 Robert Frost の思想、とりわけダーウィニズムに関わる理解を深めるために、Peter J. Stanlis, *Robert Frost: The Poet as Philosopher* (Isi Books) の日本語訳を、共訳書『ロバート・フロスト——哲学者詩人——』(晃洋書房) として出版した。主としてダーウィニズムと神学の関係をめぐるフロストの立場を詳述した章を翻訳することで(序文、第 2 章、第 3 章)、19 世紀

から 20 世紀における英米の地質学言説を確認し、ダーウィン進化論における、チャールズ・ライエルの影響関係についても理解を深めることができたが、この点は、上記「追憶のなかの南海」における 19 世紀の風景美学をめぐる課題に関連している。

当初計画していた研究費と、実際に交付を受けた研究費が異なったために、カリブ海文学、現代日本文学に関わる分析の公刊など、研究期間中に果たすことができなかった課題がいくつかある。これらについては、研究期間終了後、個人研究の枠組みで継続することで、対応する予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 2 件)

(1) 橋本安央 『『白鯨』の海、棄子の夢』『アメリカ研究』第 46 号 依頼論文 2012 年 19～32 頁

(2) 橋本安央 「エイハブの涙——『白鯨』再読——」『英米文学』第 55 号 査読なし 2011 年 206～220 頁

[学会発表] (計 4 件)

(1) 橋本安央 「震災後に読むアメリカン・ルネサンス」(シンポジウム) 日本ソロー学会全国大会 2011 年 10 月 7 日 京都外国語大学

(2) 橋本安央 「『白鯨』の海、棄子の夢」北海道アメリカ文学会第 154 回研究談話会 2011 年 9 月 10 日 札幌市立大学

(3) 橋本安央 「追憶のなかの南海——*Typee* と *Omoo* をめぐって」日本ナサニエル・ホーソン協会関西支部研究会 2009 年 12 月 25 日 関西大学

(4) 橋本安央 「『白鯨』——精読の冒険」日本アメリカ文学会関西支部例会 2009 年 9 月 12 日 相愛大学

[図書] (計 3 件)

(1) ピーター・J・スタンリス (原著)、橋本安央 他 4 名 (訳) 晃洋書房 『ロバート・フロスト——哲学者詩人——』(共訳) 2012 年 1～11 頁、43～85 頁

(2) 大井浩二 (監修)、橋本安央 他 18 名 英宝社 『異相の時空間——アメリカ文学とユートピア』(共著) 2011 年 22～38 頁

(3) Arimichi Makino (編集)、Yasunaka Hashimoto 他 10 名 南雲堂 *Melville and the Wall of the Modern Age* (共著) 2010 年 143～163 頁

6. 研究組織

(1) 研究代表者

橋本 安央 (HASHIMOTO YASUNAKA)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：60300274